

2009年4月30日発行

江戸遺跡研究会会報

No. 118

江戸遺跡研究会

<http://www.ao.jpn.org/edo/>

江戸遺跡研究会 第120回例会のご案内

日 時：2009年5月20日（水）19：00～

内 容：惟村 忠志氏

「江戸における境内墓地の調査 ー近年の調査成果を中心としてー」

会 場：江戸東京博物館 学習室2

交 通：JR総武線両国駅西口改札 徒歩3分

都営地下鉄大江戸線両国駅（江戸東京博物館前）A4出口 徒歩1分

参 加：自由・事前申込不要

問合せ：東京大学埋蔵文化財調査室（堀内・成瀬）03-5452-5103

江戸遺跡研究会公式サイト

<http://www.ao.jpn.org/edo/>



◇江戸遺跡研究会第119回例会は、代表退任記念講演として2009年3月18日（水）午後6時30分よ◇
◇り江戸東京博物館学習室2にて行われ、寺島孝一氏より以下の内容が報告されました。以後、代◇
◇表は、古泉弘が引き継ぎ活動してまいります。今後とも、ご支援・ご鞭撻をお願い申し上げます◇

江戸遺跡と江戸の暮らし

－研究会の二十年をふり返って－

寺島 孝一

二十年以上にわたって務めさせていただいた、当会世話人代表をこのたび退任させていただくことになりました。といっても、強いリーダーシップで会を主導してきたわけではなく、年一度の大会での冒頭の挨拶、発表タイトルめくりの「執筆」や、大会・例会の会場使用申し込み手続きなどを主な仕事としていただけで、はなはだ頼りない「代表」であったと思っております。

この研究会が「江戸情報連絡会」として発足する時、古泉弘さん、橋口定志さん、小林克さんの三人が膝づめ談判に来られ、江戸遺跡調査の経験がはるかに少なかった私が世話人代表を引受けることになったのです。

しかし頼りないなりに、引き受けるからにはそれなりに会の方向をきちんと設定する必要があると考え、当初の世話人と話し合っ、会の目的を「江戸遺跡発掘に関する情報交換、関連諸分野との交流」にほぼ限定し、例えば「江戸考古学のモデルを構築する」といったような、だいそれた領域には立ち入らないようにしてきたつもりです。これが、世話人の中の軋轢も特に生まず、二十年以上にわたって会を続けられた一つの要因だったのかもしれない。

ただ私自身には、江戸遺跡の発掘を土台にして、何を明らかにしてゆくべきかという強い問題意識がありました。

江戸遺跡に関わった当初は、発掘の手続き・手法は他の遺跡と基本的に同じであっても、みつかる遺構や遺物が、これまでに経験したことのないものばかりで、その対応に目一杯だったような気がします（以後も決して江戸発掘のベテランになったとも思っていないが）、ある程度江戸遺跡に慣れてくるに従って、みつかったものをどのように江戸時代の歴史の中に組み込んでゆくべきかを考えました。

その時に、以前の職場であった古代学協会の、角田文衛先生の「古代学序説」に流れる考え方が基礎になったのはいうまでもありません。勿論、私の能力は先生の爪の垢ほども有りませんから、何程のことができるわけではありませんが、凡人は凡人なりに、「自分流（今マスメディアで随分使われていて、私は大嫌いな言葉ですが）」の江戸像を組み立てたいと思いました。

それについては、「これまで『考古学』で伝統的に積み重ねられてきた方法は使わない」「他分野に土足で踏み込む」の二つの原則を（密かに）心に刻み込みました。

その結果については、本誌の「どんぶり問題割り箸思案」の連載など、機会があるごとに発表させていただきましたので、ここで改めてはふれません。

遺構や遺物を集成・分析して「もの」を見つめ尽すことによってその時代を明らかにするという立場からすれば、見つかった物が文献などでどのように扱われているかなどを論じたものなど異端でしょうし、「文献」研究者が血のにじむような苦労をされて刊行された種々の翻刻を、発掘屋が自分の都合の良い部分だけ引用するという態度は、素人の盗人たけだけしい行為とみえるかもしれませんし、実際各分野の専門家からみれば、稚拙な部分が多々あることは自分でも想像ができます。

ただ、歴史学でも各専門分野は、ますます緻密になり細分化されて、全体の姿が見えにくくなっているような気がします。そして、江戸の記憶の全くとだえた私達にとどく、たとえばNHKをはじめとする時代劇は、当時の社会状況ではあり得ない事ばかりをつづった、トレンドードラマになり果てていますし、自治体やメディアにとり上げられる江戸時代は、これまで「知識人」にいやというほど聞かされてきた「欧米では」に近い言葉になってきたように思います。ちょっと前、東京地下鉄の車内広告で「江戸しぐさ」なるものがさかんにとりざたされていましたが、あのような行為が江戸のどこで、どのような階層によってなされていたのか？ うそっぱちも程々にしてもらいたいものです。

発掘でみつかったたくさんの粗末な物。これをどのような人達が、どのようにして使っていたのか。私の興味を中心はそこにあったし、そこからみえる江戸の社会が、今の、物が有り余って更に消費を刺激しなければたちいかない社会とくらべて、いかに貧しくても、私には魅力的にみえたのです。

人権やプライバシーなど全くない狭い世界。それでも生きるためにお互いに助け合わざるをえなかったこの時代を、これからも見つづけていきたいと思っています。

今後は一世話人あるいは一会員として、当研究会にお世話になりますが、この節目に際し、至らない「世話人代表」を、二十年以上の永きにわたってもりたてて頂いた会員ならびに世話人の皆様方に、厚く御礼申し上げます。

ご 挨拶
—世話人代表の交代にあたって—

古泉 弘

江戸遺跡研究会の設立以来、23年間世話人代表を務めてこられた寺島孝一さんは、4、5年前から辞任したい意向を漏らしておられました。その都度慰留してきたのですが、このたびは東京大学を退官されることもあってか翻意不可能とみて、やむなくこれを了承することとなりました。とりあえず、私が後任に当たることになりましたので、ご挨拶申し上げます。

当会は、当初「江戸遺跡情報連絡会」として発足した経緯からもわかるように、江戸の遺跡の調査を行っている研究者たちの情報交換の場とすることを目的として発足しました。1年後に現在の名称に変えてからも、その趣旨は大きく変わっていないといえます。そのため、会の方向性はあまり絞り込まず、緩やかなまとまりの中で運営されてきたように思います。

私たちはいくつもの研究会に所属したり関係を持ったりしていますが、ともすれば活動に加速がつきすぎて空中分解を起こしてしまった例を目にしてきました。長く続けばよいというわけではありませんが、江戸研の設立趣旨からいえば継続も大切なことと思います。この辺りは世話人たちも認識していて、大きな危機や問題に遭うこともなく今日に至っています。

寺島さんは、代表としてあまり強い牽引力を発揮されることを避け、世話人たちの自主性に委ねる形で会を運営されてこられました。活動に加速がついて周りが見えなくなる頃になると、タイミング良くブレーキを引く役割を担ってこられました。まさに大人の采配といったところでしょう。この手腕も、江戸研の運営を安定させてきた大きな業績にあげられます。

寺島さんは「近世考古学」という用語には否定的で、その辺は私やほかの世話人と認識の異なるところもありました。しかし、異を排することなく多様性を包み込むのも江戸研の良さで、さまざまな意見をあえて一つに統一することなく、緩やかな共通目的の中で会の大枠が維持されてきました。これを馴れ合いとみるかどうかは各人の判断にまかされるでしょう。

一方で江戸遺跡を研究するのは考古学だけではないとの寺島さんの持論は、私も大いに賛成で、江戸研は文献史学をはじめとする関連諸学との交流を進め、その結果として江戸遺跡をめぐる大きな輪が出来てきたように思います。また、結果として江戸研の活動は東京から近世の考古学の必要性を全国に発信する牽引車的な役割を果たしてきたとも自負しています。

さて、後任の私ですが、寺島さんとは阿吽の呼吸で会の運営に係ってきたつもりですが、ものごとを決断する能力に欠けていることの自覚が日に日に高まるこのごろです。したがって、世話人間の合議がいつそう大切になると思われまます。会員の意見や希望を聞いて、良い意味で大らかな、悪くいうとルーズな江戸研の伝統を受け継いでゆきたいと考えております。

会費納入のお願い

江戸遺跡研究会では、会報送付の通信費として1年に¥2,000の御負担をお願いしております。2009年につきましても同封の振込用紙にて通信費の振り込みをしていただければ幸いです。

また、前年以前の未納入の方につきましても重ねてお願いいたします。何人の方が、5年以上未納になっております。一昨年には、運営費の負担増から会員の皆様には通信費の値上げもお願いした経緯もあり、ご理解の上必ずやお支払いをお願いいたします。

◇第22回大会「江戸をつくった土木技術」に参加された新宿区の平山尚言さん、井上美奈子さんか◇
◇ら参加記をいただきました。ありがとうございました。◇

江戸遺跡研究会第22回大会「江戸をつくった土木技術」参加記

文化財研究員 平山 尚言

(新宿区文化観光国際課)

2009年2月7日(土)・8日(日)両日行われた江戸遺跡研究会第22回大会「江戸をつくった土木技術」に参加し、若干の感想を述べさせていただきます。

北垣聡一郎氏は石垣の特徴・変遷を具体的な事例をまじえながら紹介するなかで、中世職能技術集団に系譜をもつ「穴太」が17世紀に石工へと移行していく社会的変容について述べられました。その後、「美濃部庄次郎」に代表される石の取扱い一切を取り仕切る請負商人が江戸城改修を担うまで展開することを論及されました。

池田悦夫氏は都市部の土木技術の進展に際し、その在地の自然環境が大きく影響するとの前提に立ち、縄文時代前期以降の海水面の変動とその後の地形変化について言及されました。その上で、小石川周辺の低地・崖地でみられた近年の調査成果を踏まえて詳述されました。

仲光克顕氏は中央区の検出事例・基本層序を比較提示し、初期の盛土造成で町人地はシルト質を主体とした盛土で、武家地は砂質を主体とした盛土の築填である差異を指摘されました。

石崎俊哉氏は汐留海浜地区の調査事例より、脇坂家・伊達家・保科家の各大名屋敷造成における土留めの構造を詳述されました。また、砂質を主体とした盛土の堆積状況より他所からの土砂搬入によらない近傍での入手・地盤改良に近い造成を想起されました。

毎田佳奈子氏は港区西久保城山土取場の発掘調査より、その旧地形の復元と採取土量を推測されました。後代になだれや湧水の変化をもたらした点についても指摘されました。

後藤宏樹氏は江戸城での築城技術を具体的に紹介された後、その技術が17世紀中葉以降に大名屋敷等の石垣や排水施設構築に採用されていく過程を例示されました。

大八木謙司氏は品川台場の調査成果を振り返り、文献や絵図史料をまじえながら重層的な解題を予察されました。

森田克行氏は胴木組の分類を提示と粋工法の展開から、大規模築城技術が近畿から周辺地域への拡散をもたらしたと論述されました。

鈴木一義氏は江戸時代の測量技術の変遷を紹介するなかで、検地測量術の広がりや鉾山技術が寄与した側面を指摘されました。

また、紙上発表より内野正は石組施設の変遷を4段階に設定し、その石材の特徴・消長を例示されています。

今回のテーマである「土木技術」に関して広範な討論が行われた後で、谷川章雄先生が総括されたなかで、周辺部を含めた都市形成の差異・進展を見据えた視座は、普段、新宿区内で調査の一端を携わる者としても考えさせられるところです。

現在、新宿区では千代田区と港区とともに寛永 13 年(1636)の江戸城外堀完成より 400 年目にあたる 2036 年に向けて「江戸城外堀跡保存管理計画」を策定しています。今後ともこのような討論・発表の場が盛り上がり、より関連諸科学と連携した近世江戸の歴史像の構築に向けその土木技術が寄与した役割が解題されることを期待しています。

江戸遺跡研究会第22回大会「江戸をつくった土木技術」参加記

文化財研究員 井上 美奈子

(新宿区文化観光国際課)

去る 2009 年 2 月 7 日・8 日、江戸東京博物館において江戸遺跡研究会の第 22 回大会が開催された。今回は「江戸をつくった土木技術」というテーマで、江戸の計画的城下町の形成と成立を土木構に焦点を当て、基調報告を含めた 10 本の口頭発表と 2 本の紙上発表が行なわれた。

開会挨拶で寺島孝一先生がおっしゃっていたとおり、両日は、九州近世陶磁学会の発表と重なってしまい、参加者の人数が懸念されていたようだが、そのような心配はせずとも会場には多くの方が出席されていた。

今大会は、大会趣旨で梶原勝氏が述べられたように「埋める」「掘る」「盛る」「積む」「削る」をキーワードにそれぞれの発掘調査事例を挙げ、江戸の土木技術の変遷に各々アプローチしている。

筆者には、発表された方々一人一人を論評する技量と知識がないため、今回のテーマである「土木技術」全体に対する感想を若干述べさせていただく。非常に大きなテーマであるために、先に挙げられたキーワードを 1 つ 1 つ分けても研究大会が出来るのではないかと思われるくらいだが、今回はそれぞれの観点から同時に目的に迫るという意味において、大変重要な研究会であったと思う。討論も多岐に渡り、参加者自身も遺跡に対する総合力が問われている大会なのではないかと感じた。

ただ要望を言えば、中世から近世への時代の移り変わりの中で、土木技術は何が劇的に変化し、何が踏襲されていったのかももう少し明確に提示して欲しかった。また、両者となる要因についても今後詳しく知っていきたいと思う。これはあくまで想像だが、例えば新しい画期的な技術を得た集団がいたとしても、それを受け入れなかった集団がいたということも考えられないだろうか。それは、池田悦夫氏が述べられた地形的な差異であったり、仲光克顕氏の述べられた盛土の土質的な差異などが関係してくるかもしれない。

今回は、主に江戸前期を中心とした研究発表であったが、中期以降になると西洋からの土木技術の流入も本格化し、ますます技術は発達し複雑化していくだろう。社会的背景も変化していく中で、土木技術にもどのような変化が現れたのか非常に興味深い。今回の大八木謙司氏の発表は、まさにそうした時期の発表であったが、また改めて今回のようなキーワードを設け、中期以降の土木技術の変遷についても言及していく必要があると思われる。今後の江戸遺跡研究会に期待したい。